

四万十川辺のマイヅルテンナンショウ
－その分布と生態と保護－
(平成 18 年度)



中村河川国道事務所

あとがき

マイヅルテンナンショウが発見された入田ヤナギ林域は、その昔、四万十川が運んだ堆積土の上に成立した暖帯林と、自然堤防上の肥沃な土壌が、豊かな水とともに人々の暮らしを支えてきた長い歴史の発祥の地である。

縄文晩期(約2700年前)から弥生前期(約2300年前)にかけての「入田遺跡」は、現在の入田ヤナギ林域にあり、出土した多数の土器や石器などの遺物から、かつてこの土地で、盛んに農耕が行われていたことが伝えられている。

時代は下って中世の初期ごろ、この地に「石土村」(いしづちむら)という集落があった。集落の中央部には、長池と丸池という大小二つの池があった。池の周辺には巨木の森が茂り、樹影は水面に映えて美しく、その風光はまさに「絶景タリ」(1932 閲歴より)という。

その石土村が、明治23年(1890)、四万十川の大洪水に見舞われた。民家は悉く流出し、住民は入田の山手側に移住した。しかし、四万十川の洪水は、その後も枚挙に遑がなく、遂に昭和5年(1930)、国(当時内務省)の直轄事業により四万十川の大治水事業が開始された。工事は旧石土村の集落をはじめ入田地区の一部、二つの池や巨樹の森も、すべて入田堤防の構築に向けられた。この入田堤防工事発祥の地も、マイヅルテンナンショウの自生地である。

平成6年(1994)5月、四万十市坂本地先の四万十川に於いて、建設省四国地方整備局中村工事事務所(当時)発注の多自然型護岸工事が行なわれた。このとき河床の工事現場から、過去に流出して埋没したと思われる巨木群が10本出土した。長さ16m、重さ6tのアカガシ亜属の巨木を筆頭に8本、ほかにムクロジ2本が含まれていた。(このアカガシ亜属の代表格の1本は、防災センターに陳列中)この河床出土巨木群のふるさとも、マイヅルテンナンショウの自生地付近ではないかと推測される。

マイヅルテンナンショウの多数の個体群は、何時の時代にどのようにしてこの地に生まれ育ってきたのか。この長い歴史を秘めた入田ヤナギ林域に於いて、マイヅルテンナンショウの生い立ちを探ることは、まことに興味深いことである。しかし当面なすべきことは、四万十川のシンボルとして、この大群生地でのマイヅルテンナンショウの保護育成をいかに進めていくべきかにあると思う。マイヅルテンナンショウについて、今後、多くの皆様のご支援とご協力を切にお願いする次第である。

平成19年4月20日

マイヅルテンナンショウの芽吹き盛んな日

澤良木 庄一



澤良木 庄一

経歴

1923年高知県四万十市生れ、1954年広島大学理学部生物学科教職課程終了、高知県立高知東高等学校長、高知大学理学部非常勤講師、黒潮福祉看護専門学校長、勲四等瑞宝章、高知県功労者、高知県文化賞、第1回水環境賞、第8回寺田寅彦記念賞、第48回高知県出版文化賞。

現在

希少野生動植物種保存推進員(環境省)、河川溪流アドバイザー(国土交通省)、高知県文化環境アドバイザー(高知県)、高知県自然観察指導員連絡会会長(日本自然保護協会)、四万十川財団理事(高知県)

所属学会

日本生態学会、日本蘚苔類学会、四万十流域圏学会、土佐生物学会

著書

森を歩く(高知県文教協会) 清流四万十を探る(高知新聞社)、四万十の旅(高知新聞社)、四万十川の植物自然(川北印刷株式会社) 他

マイヅルテンナンショウを
大切にしよう



Arisaema heterophyllum